

■フォトエッセイ■

パティオ セビリアの中庭

写真・文 磯野生茂
Ikumo Isono



世界遺産アルカサルの乙女の中庭。常に多くの観光客でにぎわう

アンダルシアの中心都市セビリア（セビージャ、セビーヤ）は、スペイン屈指の観光都市である。セビリア大聖堂、アルカサル、インディアス古文書館の世界遺産のみならず、スペイン広場、黄金の塔、メトロポールパラソルなど、数多くの観光地を持つ。また、フラメンコ、セビージャFC、闘牛などに魅せられ、この街を何度も訪れる人がいる。このセビリア市に訳あって住むことになり、フォトエッセイを担当するにあたり、代表的な観光名所をまわったあと次にみるべき場

所として、個性あふれるセビリアの中庭を薦めたい。

●中庭の重要性

前提として、セビリアを含むスペインの人々にとって中庭が欠かせないものであることを説明する。

第1に、機能的な理由が存在する。アンダルシアの夏は暑く、2017年のセビリアは最高気温が44℃まで上昇した。道路の照り返しにより電光掲示板の温度表示は48℃に達し、その時間帯に外を歩くのは危険な



ピラトの家の中庭



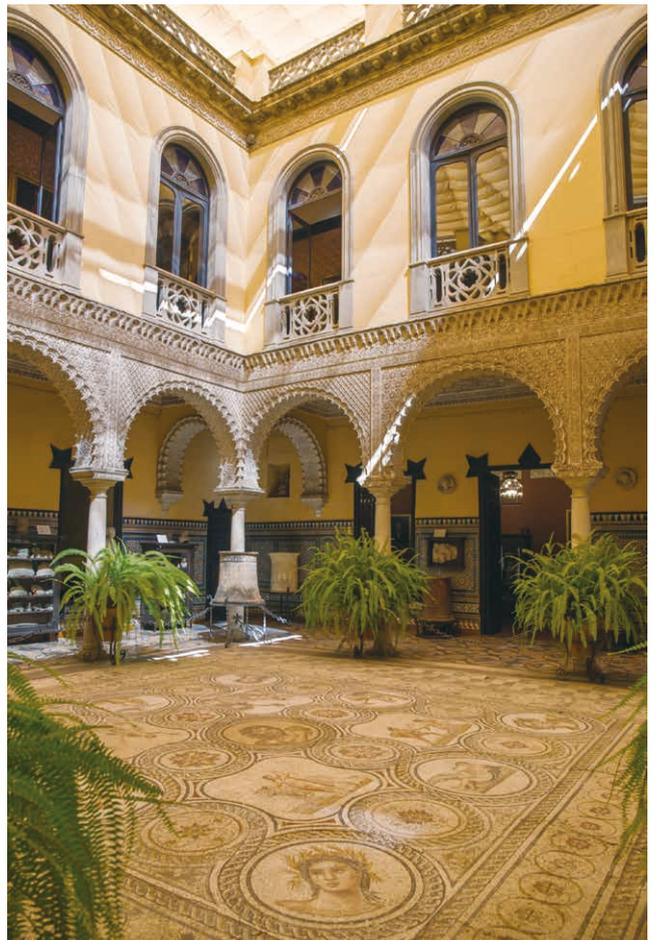
ピラトの家のアーチ柱と胸像。柱の装飾はムデハル様式である

状態であった。一方で、スペインは湿度が低く、日陰に入るとやや過ごしやすい。また1日の寒暖の差も大きく、熱帯夜になることはほぼない。このような気候下で、庭を2階、3階程度の建物でしっかり囲み直射日光を防ぎ、暖かい空気を上から追い出すことは理にかなっている。さらに、暑い日中に建物の外向きの窓を閉めシャッターを下ろし、比較的涼しい中庭側の戸や窓を開け、無理に活動せず夜を待つ、というシエスタ文化を支えている。事実、夏には建物の玄関扉を開けて中に入ったとたんに、冷房がなくとも気温が数度下がっていることを感じる事ができる。

第2は、文化的な理由である。中庭は内と外との緩衝地帯としての役割を持つ。集合住宅では、まず建物に入り、中庭を通過して、ないし上階に上がり中庭を囲む廊下を通過してそれぞれの家に行く。集合住宅では住民同士の歓談の場として使われる。加えて、中庭は客人を家に招いた際に最初に見せる私物としての側面もある。建物の道路に面した側は周りと同調しているのに対し、中庭は個性を活かし鮮麗なデザインになっていることが多い。またたとえ家のなかが高質でも、中庭は植栽や陶器で飾られている。このように中庭は自己表現の手段のひとつになっている。筆者はこれまで2カ所の集合住宅を借りたが、片方ではもっとも長く住んでいる男性が、もう片方では市内の別のところに住む家主が見回りを兼ねて、毎日丁寧に植栽の手入れや小物の入れ替えを行っていた。

●セビリヤのみるべき中庭

セビリヤの特徴として、その重層的な歴史からなる中庭に使うことのできる部材の多さが挙げられる。紀元前8世紀より人々が住み始め、古代ローマ時代には近隣に当時の主要都市であったイタリカがあった。8



レブリハ宮殿の中庭。床面にモザイクを配したため、中庭の中心に噴水がない

世紀より13世紀にイスラム期があり、その後もイスラムの影響を強く残す建築スタイルが「ヨーロッパに残されたイスラム教徒」を意味するムデハル様式として独自の進化を遂げた。16世紀には大航海時代によってスペインで最大の人口を持つ都市となり、莫大な富が流入した。また古くから陶芸の産地としても知られており、セラミックパネルが壁面装飾として使われてきた。



ドゥエニャス宮殿の中庭



ドゥエニャス宮殿の中庭回廊

具体的にセビリアでみるべき中庭を挙げていこう。まず世界遺産であるアルカサルの中庭から紹介する。アルカサルは10世紀から19世紀にかけ増改築が繰り返された王宮で、ゴシック、ルネサンス、ムデハルの建築様式を融合した建物群である。広い庭園と複数の中庭を持つが、なかでも中心的な存在として乙女の中庭があり、アルカサルを代表する写真としてこの中庭が紹介される。乙女の中庭を含むペドロ王宮はムデハル建築の代表作のひとつとみなされる。

セビリアには一般公開されている大邸宅がある。15世紀に建設されたピラトの家は、アンダルシアの宮殿の典型例である。中心に噴水を配置した中庭は、

周囲の回廊にローマやスペインの皇帝等の胸像やイタリアからの収集品を配し、また美しいセラミックパネルで壁面が飾られている。15世紀に建てられた邸宅を16世紀に大改修したレブリハ宮殿は、20世紀に入りレブリハ伯爵夫人がこの邸宅を購入し、イタリカ遺跡をはじめ各地の遺跡からの遺物を用い装飾したことで、美しい床を持つ「考古学博物館」として知られるようになった。メインの中庭では、ローマ時代のモザイクが目を引きだけでなく、ムデハル様式のアーチ柱、壺、彫像など見るべきものが多い。

大邸宅は複数の中庭を有するが、メインの中庭には特別な装飾を持たせている。この違いを強く実感でき



サリナス邸の中庭



アルガバ宮殿の中庭。建物はムデハル博物館として使われている



旧セビリア造幣局の中庭であるハバナ通り

るのがドゥエニャス宮殿である。この宮殿では他の中庭が通常の西洋式庭園であるのに対し、黄色を基調とするメインの中庭の華やかさは見る者を圧倒する。サリナス邸の中庭はその朱色の壁、美しいアーチ柱、上階のステンドグラスが特徴で、一般公開されているほか、夜間にはテーブルを並べパーティー用に貸し出されている。アルガバ宮殿も、アーチ柱に特徴を有し、中庭は写真のように椅子を並べ小劇場としても活用されている。

●様々な中庭

変わった中庭を2つ紹介したい。ハバナ通りは、現在は公道のひとつとなっているが、かつては旧セビリア造幣局の中庭であった。道路標識があるものの、他の一般道路とは明らかに違う中庭らしさを漂わせている。筆者の受け入れ先の所在地であるエキスポビルは

1992年セビリア万博を機に建てられ、ピラミッド状の天井骨組やメタルパネルの壁面等、前衛的でありながら、周囲に回廊を配し中心に噴水を有する伝統的な中庭のスタイルを踏襲している。

その他にも、集合住宅や個人宅の中庭のいくつかは道路からガラス扉越し、ないし鉄格子越しに覗くことができる。昔邸宅として使われていた建物が、現在ホテル、洋品店、イベント会場などに転用されているため、それらの利用を通じて中庭をみることもできる。また、教会、美術館、学校、病院にも特色ある中庭を持つところが多い。

いその いくも/アジア経済研究所 在セビリア海外派遣員

2017年6月より赴任。アジア経済研究所が開発している経済地理シミュレーションモデル (IDE-GSM) の拡張のため、欧州委員会共同研究センター (セビリア) との共同研究を行っている。



エキスポビルの中庭



集合住宅の中庭の例